

2014年度自己点検・評価報告書(シート)

【目標の進捗状況(達成度)評価・報告】(最終年度)

《大学》

担当(記述)部局は、 ☆印の箇所を記入してください。

I. 評価項目・要素と担当部局

本報告書(シート)の自己点検・評価項目・要素と担当部局は次のとおりである。

対象部局	統括部局：評価情報分析室 担当部局：学長室・総務部(人事課)・研究推進社会連携機構・評価情報分析室
大項目	14 内部質保証(研究科)《全学的な視点》
中項目	
小項目	14.0.1 大学の諸活動について点検・評価を行い、その結果を公表することで社会に対する説明責任を果たしているか。
要素	自己点検・評価の実施と結果の公表【担当部局：評価情報分析室】 情報公開の内容・方法の適切性、情報公開請求への対応【担当部局：学長室(広報室、法人部、財務部、評価情報分析室)】
小項目	14.0.2 内部質保証に関するシステムを整備しているか。
要素	内部質保証の方針と手続きの明確化【担当部局：評価情報分析室】 内部質保証を掌る組織の整備【担当部局：評価情報分析室】 自己点検・評価を改革・改善に繋げるシステムの確立【担当部局：評価情報分析室】 構成員のコンプライアンス(法令・モラルの遵守)意識の徹底【担当部局：総務部】
小項目	14.0.3 内部質保証システムを適切に機能させているか。
要素	組織レベル・個人レベルでの自己点検・評価活動の充実【担当部局：評価情報分析室】 教育研究活動のデータ・ベース化の推進【担当部局：研究推進社会連携機構】 学外者の意見の反映【担当部局：評価情報分析室】 文部科学省および認証評価機関等からの指摘事項への対応【担当部局：評価情報分析室(企画室)】

II. 目標の進捗状況(達成度)評価と報告【2014.4.30現在】

《進捗状況(達成度)評価》

本項目において、2009年度～2013年度の中期的な「目標」と「指標」を次のとおり設定し、毎年度進捗状況(達成度)の自己評価を行っている。進捗状況(達成度)評価は、目標の2014年4月30日現在における進捗状況(達成度)の評価(2013年度1年間の活動評価ではなく、2014年4月30日現在で目標がどこまで進んだかの評価)であり、A、B、C、Dの4段階で行ったものである。A、B、C、D評価の基準は目安として次のようなものである。

- A : 目標実現のための計画や方策などを適切に実行し、目標を達成している。もしくはほぼ達成している。
 B : 目標実現のための計画や方策などを概ね適切に実行しているが、まだ目標は達成していない。
 C : 目標実現のための計画や方策などを実行しているが十分ではなく、目標は達成していない。達成にはまだしばらく時間がかかる。
 D : 目標実現のための計画や方策などを実行していない。当然目標は達成していない。

2009年度に設定した「目標」	左記目標の「指標」	進捗状況(達成度)評価				
		2009	2010	2011	2012	2013
1. PDCAサイクルを強化する。特にAction(改善)について強化する。	→学内第三者評価によるPDCAサイクル強化の評価、改善に関する調査、院長総括の反映状況	C	C	C	C	C
2. 内部質保証に必要なデータを確定し、毎年収集するとともに情報の提供を行う。	→大学基礎データの数、基本的な指標データの数、その他データの数、研究業績データベース各項目における研究成果の公表件数	B	B	B	B	B
3. 検証可能な「目標」「指標」を設定し、毎年的確な自己点検・評価を実施するとともにその結果を公表する。	→自己点検・評価の実施と結果の公表、実施部局数、実施項目数	B	B	B	B	B
4. 2回目の機関別認証評価において適格の評価を受ける。	→認証評価の結果内容、勧告・助言の数、指摘事項の改善の状況	C	C	C	B	A
5. 各専門職大学院(専攻)が2回目の分野別認証評価において適格の評価を受ける。	→認証評価の結果内容、勧告・助言の数、指摘事項の改善の状況	C	C	C	B	A
6. 内部質保証システムの理解者を増やす。	→評価関係研修会・講演会等への参加者数(私大連研修には2013年度までに累計15人を目標とする)	B	B	A	A	A

☆

2010年度以降に設定した「目標」	左記目標の「指標」	2009	2010	2011	2012	2013
	→					
	→					

《進捗状況(達成度)報告》 担当(記述)部局は「指標」に基づいた報告をしてください。

上記で自己評価した目標の進捗状況(達成度)について、次のとおり説明・報告する。

目標1	C	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 毎年自己点検・評価を実施し、PDCAサイクルの強化に努めてきた。実施部局においては現状の把握、分析、評価を行い、その上で改善策を考えてPDCAをまわしてきた。 2009年には大学基準協会が新たに定めた10の評価項目に本学独自の5つの評価項目を加え、15の評価項目で目標を再設定し、毎年の自己点検・評価で目標の進捗評価を行ってきた。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か ＜結果＞ 現有資源の中で改善に繋げているものの、大学や法人の計画に反映されたものは多くない。指標に定めた「PDCAサイクル強化」には一定の評価をするものの、改善に関する調査、院長総括の反映状況は芳しくなく、評価は昨年度と変わらず「C」とする。 ＜課題・改善点＞ 前述のとおり、改善に関する調査、院長総括の反映状況は芳しくない。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か ＜改善策＞ 院長総括の反映については、自己点検・評価規程第9条に定められているものの、各部局、学院、大学上層部にその意識は薄いと言わざるを得ない。それは各部局等の意識の持ち方もあるが、反映するための仕組みにも問題がある。 次期の自己点検・評価を検討するにあたっては、改善・改革に繋がる仕組みを構築することで、より実質的なPDCAサイクルがまわるようにする。</p> <p>その他</p>	☆
目標2	B	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか ①大学基礎データ、②大学データ、③基本的な指標データ、④特定項目データを毎年作成・収集し、①②については関西学院大学の公式Webサイトで公表している。③は学内者のみが閲覧可能な自己評価統合ウェブシステムに掲載、④は自己点検・評価の報告書への貼付により関係部局に提供している。①②については、2012年度に認証評価に対応すべく、大学基準協会の最新の様式に変更した。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か ＜結果＞ ①～④の各種指標データを毎年提供している。 ＜課題・改善点＞ 研究業績データベースについては2014年7月から新システムに移行する予定だが、研究成果の入力率は未だ高くない。 以上のことから、進捗評価は「B」とする。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か ＜改善策＞ 基本的な指標データについても学外公表する。新システムの研究者データベースの入力内容充実を図るため、研究成果をはじめ、教員に積極的な入力を促す。</p> <p>その他</p>	☆
目標3	B	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 2009年度に、大学基準協会が新たに定めた10の評価項目に本学独自の5つの評価項目を加え、15の評価項目で毎年の自己点検・評価に取り組んできた。2009年度には各部局が全項目で2013年度まで5年間の目標を設定し、毎年の自己点検・評価で目標の進捗状況と現状、効果が上がっている事項と伸長させるための方策、改善すべき事項と改善方策について報告し、第三者評価を受けた。2012年度、2013年度は機関別認証評価の対応による事務局、各部局の繁忙が予想されたため、目標の進捗状況報告のみとした。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か ＜結果＞ 毎年全部局で自己点検・評価を実施し、結果を公表していることからすれば「A」の評価だが、2009年度に目標を設定した際には、目標、指標、評価基準について共通の理解があったとは言えず、目標のレベルに差異があったり、指標と評価基準があいまいであったりと、検証可能な「目標」「指標」の設定→的確な自己点検・評価の実施という点で不十分であり、評価は「B」とする。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か ＜改善策＞ 次期の自己点検・評価における目標の設定において、目的と目標の階層構造の考え方をを用いることや、参考となる指標を提示するなど、検証可能な「目標」「指標」の設定→的確な自己点検・評価の実施につながるような仕組みを構築する。</p> <p>その他</p>	☆

目標4	A	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 2013年度の機関別認証評価受審に向け、2012年度に5月1日現在の状況を自己点検・評価報告書としてまとめ、各種資料と併せて指定された期限内に提出した。 毎年6月の評価推進委員会において、大学基準協会の「評価に際し留意すべき事項」のうち、評価の基準が数値で示されているものについて本学の状況を報告し、提言指針に触れる事柄について改善を促してきた。 理念・目的、各種方針の設定と見直し及び明示、検証する仕組みの構築、シラバスの充実等について、毎年の自己点検・評価と各種会議等でアナウンスすることにより整備を促してきた。 また、報告書提出後も、2013年10月の実地調査までに改善できるものについて各部署に対応を促した。 努力課題はあったものの、目標であった「適合」の評価を受けたこと、特に第2期の認証評価で重視されている内部質保証について高い評価を得たことから、評価は「A」とする。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か ＜結果＞2014年3月に大学基準協会から「適合」の認定を受けた。 ＜良かった点・効果が上がった点＞機関別認証評価受審を機に、「Do」欄で記述したような事柄の整備が進んだ。評価結果では、9つの「長所として特記すべき事項」が挙げられた。 ＜課題・改善点＞5つの努力課題が示されたほか、総評の中でも改善を求められる事柄が示された。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か ＜改善策＞認証評価結果で指摘を受けた努力課題について、3年後の7月末までに大学基準協会に改善報告書を提出する。そのために、2014年度から改善策を検討、策定し、毎年改善状況をチェックする。 総評の中で改善を求められている事柄についても、努力課題と同じサイクルで改善を進める。</p> <p>その他</p>	☆
目標5	A	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 司法研究科(以下LS)が日弁連法務研究財団で、経営戦略研究科会計専門職専攻(以下AS)が国際会計教育協会で2013年度に分野別認証評価を受けた。経営戦略研究科経営戦略専攻(以下BS)は2014年度にABEST21での受審に向けて準備を進めてきた。3つの研究科のうち2つで「適合」の評価を受け、残る1つの研究科についても着実に受審に向けての準備・対応を進めていることから、評価は「A」とする。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か ＜結果＞LS、ASとも「適合」の認定を受けた。 ＜良かった点・効果が上がった点＞LSは受審先である日弁連法務研究財団から「教育活動の質は全国的に見ても高いレベルにある」との評価を受けた。 ＜課題・改善点＞LSは「教育体制」の中の「教員のジェンダーバランス」の評価項目でのみ「C」の評価があった。ASはすべての項目で「満たしている」という評価ながら、そのうち4項目(「少人数教育」「適切な授業方法等」「収容定員の適宜見直し」「教員の授業負担」)で要望事項があった。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か ＜伸長策＞BSは2014年6月末の報告書提出に向けて、5月末には報告書をまとめ終え、評価推進委員会に提出し、承認を得る。 ＜改善策＞LSでは報告書の中で指摘のあった改善を要する事柄のほか、実地調査と意見交換で指摘のあった事柄について、研究科の科長室委員会(執行部)と教務委員会や学生委員会等の関係する委員会において検討を始めている。 ASでは、評価報告書で示された要望事項を中心に、専攻会議等で審議し、新カリキュラムに反映させるなどの改善を図ることになっている。改善方策について報告を求められることはないが、次回認証評価受審時には改善状況が問われることになる。</p> <p>その他</p>	☆
目標6	A	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 評価情報分析室からの働きかけにより、2010年度から毎年、職員研修の一環として人事課指名による3名と、評価情報分析室からの案内による希望者3名の計6名を私立大学連盟主催のマネジメントサイクル(PDCAサイクル)修得研修に派遣している。2009年度に評価情報分析室から派遣した1名と合わせて、2013年度までで合計25名が参加した。私大連の研修で目標としていた参加者累計15名は大幅に超えていることから、進捗評価は「A」とする。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か ＜結果＞学部・研究科の事務長・事務長補佐クラスの多くがこの研修の経験者となった。 ＜良かった点・効果が上がった点＞目標・指標・評価基準の設定等も含めた内部質保証システムについての理解者が増えた。 ＜課題・改善点＞研修に参加しているのは職員のみであり、研修等の参加による教員の理解者は増やせていない。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か ＜伸長策＞引き続き、私大連研修への派遣を促す。また、参加者へのフォローアップ研修や理解者を増やすその他の方策も考える。 ＜改善策＞これまでこの研修への参加は職員のみだが、今後は教員にも参加を呼びかける。</p> <p>その他</p>	☆
備考			☆